

【聖書】

ルカによる福音書 13:22 イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。23 すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。26 そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。27 しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。28 あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。29 そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。30 そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」

1 人間の怠惰

ルカ福音書は、大きな分岐点があります。第9章15節です。そこには「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向う決意を固められた。」とあります。この時まで、主イエスは北部のガリラヤ地方で伝道活動をしておられましたが、これ以後、エルサレムを目指して南へ進みます。それは「天に上げられる」ためなのですが、その前に十字架に磔にされて殺されるため。この事を踏まえると、今日のテキストの最初、第13章の22節「イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。」というのが、単なる伝道旅行を描いたものではない事がわかります。主イエスがこの時、エルサレムで起こる事をどれだけ正確にご存知であったかは、わかりません。しかし、旧約聖書の預言者と同じような孤独な死が待っている事は、覚悟しておられたでしょう。主イエスは「この地上の人々に神の国をもたらすため」と決意され、ご自身の道、十字架への道を一步一步進んでおられました。

私たちも、自分の死について考える事はあります。私たちは、確実に誰でも必ず死の時を迎えるのですから。今は、その死に向っている時だ…と自覚し、覚悟します。その上で、「今という時」をどう生きるのかと問われ続けている一人一人です。それは明らかかな事でありましょう。しかし、私たち、往々にして、その問いを避けているし、忘れていきます。死に向って進むべき「自分の道」とは何かを真剣に考えていないのです。そのような呑気さというか怠け心が、私たちの内にはあると思います。

主イエスに対し「救われる者は少ないのでしょうか」と質問する人の内にも、そのような怠け心が隠れているようです。もし「自分の命は明日終わるかもしれない」と自分の滅びについて考え、救いを真剣に考え求めているのだとしたら、「救われる者は少ないの

でしょうか」などという他人事のような質問はできなかつたでしょう。

2 狭い戸口から入る

主イエスは、そのように質問した人の怠惰な心を見抜いておられたのではないでしょう。ですから、尋ねた人に直接答える事をせず、その場にいる「一同」に対して、こう言われました。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」この「努めなさい」とは「戦う」とか「競技をする」とも訳される言葉だそうです。「狭い戸口から入るように戦いなさい」、そう聞くと、「救われるか否かは早い者勝ちだから頑張れ」と言われているようですが、ここではそういう意味ではありません。

狭い戸口と言うと、真っ先に思い浮かべるのは、日本のお茶室の小さな入口です。千利休の発案だそうです。お茶室に入るための入口は約66cm四方、誰が入るにしても、膝を曲げて頭を低くしてにじりよらなければ入れない大きさです。殿様だろうが誰だろうが、刀は帯びて入る事はできず、丸腰にならねばなりません。そうして入った先の茶室には、正座した亭主が待っており、その亭主と相対して座る事となります。茶室とは、その中での一挙手一投足にその人がどういう人間であるかが現れる、特殊な空間のようです。一人の裸の人間として見られる、それはそら恐ろしい事です。

だから、「狭い戸口」から入るために、自分との戦いがあります。虚飾、虚栄を捨て去る勇氣、覚悟が求められるからです。生半可な気持ちではできない。主が仰る「入ろうとしても入れない人が多いのだ」とは、そういう意味ではないでしょうか。私たちは、生きていくうちに色々なものを得ます、身に付けます。そういうものは、案外と捨てる事ができないものです。「救い」とは何の関係もない身分とか地位、富とか名誉を肌身離さず大事にするような場合があります。でもそれは愚かしい事、悲しい事です。そういう救いとはなんにも関係ないものを捨て去って、裸で神の御前に立つ。そのための自分との戦いをするつもりもなく、他人事のように「救われる者は多いのか少ないのか」という質問は、怠惰と言わざるを得ません。主イエスは、「そんな質問をしている暇があるなら、狭い門から入るように努めなさい」と叱咤激励されたのかかもしれません。

3 戸はいつか閉められる

なぜなら、神の国の戸はいつかは締められるからです。「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。」「家の主人が立ち上がって、戸を閉める」とは、家の内側から鍵をかける事、なすべき事がすべて終わった事を示します。いわゆる、終わりの時です。終わりの時に降に家に来たとしても、「お前たちがどこの者か知らない」と言われるだけだ、と主イエスはおっしゃる。そんな時刻に来る人とは、主人から夕食に招かれていた人かもしれません。彼らは、いつ行っても自分は受け入れてもらえると考え、主人の招きなどそっちのけで、それぞれ自分のやりたい事を好きにだけやっていたのです。ここに主人に対する甘え

があります、もっといえば主人を侮っている、たかをくくっている傲慢な態度とも言えます。しかし、そのような態度が通じなくなる時が来るのです。主人が戸を閉める時刻は事前に決まっているのではなく、いつ戸を閉めるかを決めるのは主人です。招かれていた者が決める事ではありません。いつ人生の終わりの時を迎えるのかを、私たちが決める事ができないのと同じです。私たちは命の創造者でも支配者でもないので。しかし、主人の招きから大きく遅れて来た人々は、そのことを本当に棄ててはおらず、自分が神となっているのです。

4 神を侮る

主は言われます。「そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。」これまで主人の招きを侮り、全然応えてこなかったのに、いざ戸が内側から締められ家に入れてもらえないと分かった途端、「一緒に食事をした事がある」とか、「教えを聞いた事がある」という事を持ち出してくる私たち人間の浅ましきはなんとも滑稽です。

しかし、滑稽どころの話ではありません。主人は、この私たちの浅ましきの底にある、自分たちの都合で神を利用しようとする心を「不義」と言われています。神を神とせずに侮っていた、何をしても神は許してくれるとたかをくくっていた、しかし、いざ神の恵みを受けられそうになったと判った途端、手のひら返しをする者たちの心の内にあるものを神は厭われるのでしょうか。問題は過去のことでない、今現在、自分が熱心に「狭い門から入るように努め」ているか、神の救いを、神の国をただひたすらに求めているか、それだけが問題なのです。そういう意味では、洗礼を受けたキリスト者である私たちも「お前たちがどこの者か知らない」と天の父から言われる可能性は多いにあります。洗礼を受けていても、今、救いを求めていないのであれば、神を求めず神を侮っているのであれば、やはり「不義な者たち」と呼ばれても致し方ありません。問われているのは、今現在の自分自身のあり方です。

5 遅すぎることもある

ある牧師が説教の中で次のような言葉を引用していたそうです。「神の愛には、遅すぎることもある。神の愛はいつでも遅すぎることはない、神はいつでも待っていてくれる…というのであるならば、われわれが霊的に眠っていても知らぬ顔をしている神になってしまう。われわれは眠るわけにはいかないのだ。神の愛が呼んでいる。神の愛が我々を呼び覚まそうとしている。眠るわけにはいかない、今、目を覚ませと、主イエスは声をかけておられる。」

「神の愛には遅すぎるということがある」とは衝撃的な言葉です。いつもこれとは逆の事が言われる事が多いからです。「神の愛には、遅すぎるという事はない。神は待っていてくださる」と。それは一見したところ、神の愛の深さや寛大さを賛美しているようです。しかし実態はどうでしょうか。「神様はいつまでも待っていてくださる」という言葉の

「いつまでも」という部分には、私たちの甘え、いや、神を神と思わぬ傲慢が入り込んできているのです。神は「いつまでも無限に待ってくださるから、その招きにすぐに答えなくてもよい。」ということではないのです。

それがよく現れているのは、ルカ福音書の十字架の場面です。十字架の主イエスの左右には、二人の犯罪人がいました。その内の一人は、主イエスに向かって「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と罵りました。しかし、もう一方の犯罪人は、主イエスを罵る犯罪人に向かい「お前は神をも恐れなのか、同じ刑罰を受けているのに、我々は、自分のやった事の報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」と言い、その上で、彼は主イエスにこう願いました。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」

彼は、死の間際に、隣の十字架の上で「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈っておられる主イエスの姿を見、その声を聞いたのだと思います。主イエスが十字架の時、誰よりも身を低くして狭い戸口をくぐっておられる、そのことを最もよく判ったのが、同じく十字架にかけられている犯罪人。彼らも同じく身が裂かれる耐え難い痛みと誰も助けてくれない絶望に叩き落とされていたからです。しかし、それでも主イエスは自分自身の救いを願うのではなく、自分を殺そうとする者のために祈っておられる。そこに、彼は人間のために深く身を屈める神を見出し、畏れに満たされたのでしょう。彼はそこで私たちのために低く身を屈める神と出会ったと言ってよいと思います。この出会いによって彼は変えられました。命の終わりを迎えるぎりぎりの時に、自分が犯してきた罪を心から悔い、主イエスに赦しを乞う者へと変えられました。勿論、今頃罪を認めても十字架から降ろされるわけなく、死刑を免れる事はできませんし、主イエスを知ってしまったのち、それを願っている彼でもないでしょう。この男は、人間からの赦しを求めているのではなく、神の赦しを求めている者へと変えられました。主イエスによって変えられました。主イエスに倣って身を低くすることができました。主イエスはそんな彼に対して「遅すぎた」とも「不義を行う者よ、わたしから立ち去れ」とも、決しておっしゃいません。なんと言われたか。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われたのです。彼の悔い改めは、遅すぎませんでした。神はいつまでも待ってくださるわけではない、しかし、生きている限り、いや、生かされている限り、私たちは、いつでも私たちのために身をかがめてくださる神と出会い悔い改めることができるという事は、大きく深い慰めです。

ですが、その私たちの命がいつまで続くわけではないことは、深く弁えておく必要があります。同じ主イエスの祈りを聞いていた筈のもう一人の犯罪人が、主を罵り死の間際にあっても罪を悔い改めず、自分が生き延びることだけを求め、却って孤独で悲惨な死を迎えたこともまた事実であるから。

6 礼拝こそ被造物の喜び

このように主イエスに倣い「狭い戸口に入るために身をかがめる」とは、「人間の本来の姿を自分の内に呼び覚ますことだ」と言った人がいます。私もそうだと思います。天の

父なるみ神は、いつも真剣に、私たちの中に『本来の人間』を呼び覚まそうとしておられるのです。そのために愛する御子を十字架にかけたと言ってもよいと思います。人間本来の姿とは、イエス・キリストのあり方だからです。イエスはまことの神であり、まことの人。まことの人本来の命に生きる時、私たちの内は深い神の義なる愛に満たされ、神を賛美せずにはいられません。先ほど交読文として読み交わした詩篇102編19節には、「後の世代のために／この事は書き記されねばならない。『主を賛美するために民は創造された。』」とある通りの出来事が私たちの内に起こるのです。被造物である私たちのまことの喜びは、まことの人イエス・キリストを通して、創造者である主と出会い、まことの自分を発見し、心から主を愛し、感謝と賛美を捧げるところにあるのです。これこそ、人間の本来の幸せです。この幸せは、狭い戸口から入る戦いを戦うだけの価値が十二分にあるもの、その戦いの何千倍の喜びをもたらすものです。そして神との出会いは、主イエスに倣って自分を小さくし神を大きくする所に起こります。つまり礼拝の場所で起こるのです。

だから、私たちの本当の喜びは、狭い戸口から入り、神を礼拝する事にあると言えると思います。狭い戸口から入る、自分を小さくし神を大きくして神のみ前に出て、悔い改めの祈りを捧げる、聖霊の導きを祈りつつ聖書を読み、神の語りかけを聞く、自分の想いを正直に打ち明け、祈り願い感謝の報告をする、そのように礼拝する時、神に造られ、愛され、生かされ、導かれている本来の自分を見出し、その喜びと感謝を味わうことができます。それは大きな喜びです。本日の礼拝の招詞「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」（ネヘミヤ記8：10）とある通りです。

7 主イエスの招き

ですから、主イエスが、「町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進む」とは、人々を神の国、即ち、礼拝に招いてくださっている…と言えます。その招きに兎に角応えて、方向転換し、神を神とする。それまでの自分第一としていたものを捨て、内面に巢食っている奢り高ぶりという「不義」が打ち砕く戦いがあります。激しい戦い、人間の力では負けてしまう戦いです。

しかし、私たちが自分の力では負けてしまうような戦いだからこそ、主イエスは、ほうぼうを巡り歩き、礼拝に招きつづけられた…とも言えます。自分を捨てる気持ちを自力では持つことは私たちにはできないから。礼拝に出続けて、十字架と復活の主イエスと出会うことができ初めて、自分を捨てようと決心できるのです。礼拝で主イエス・キリストの十字架と復活を知り、自分の身を低くすることの幸いを知るのです。そうして初めて私たちは、狭い門をくぐることができ、神と出会うことができます。狭い戸口のむこうには無限に広い父なる神がおられます。この父なる神のみ前にこそ、神に造られ愛される本来の私たちがいる場所です。

8 神の国の宴会の席につかされる

日常生活の中で一人神のみ前に額づき、本来の自分の命のありかを見出す礼

拝は、恵み深いものです。しかし、こうして同じ信仰を与えられた者たちが、たとえ体は離れていても霊では一つになって、主の甦りの朝に時を同じくし、同じ御言葉を聴き、祈り同じ賛美を捧げる事ができる喜びは、また格別なものです。主が甦られた日曜日の朝、それぞれの場所から呼び出され集められて仲間と共に献げる礼拝は、主日礼拝は、神の国の宴会のさきがけとも言えます。主イエスが「**そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。**」と仰っている神の国の宴会です。ここで「席に着く」というのは横たえるという意味があります。主イエスの時代の食事は敷物の上に寝そべって食べるのが普通でしたから、「席に着く」も「横たわる」も同じなのです。身を横たえるというのはリラックスした姿勢です。とても敵の前ではできません。そしてこの「席に着く」は受動形です。正確に訳せば「**席につかされる」「身を横たえさせられる**」です。この「席に着かされる」という単語がルカ福音書に出てくるのが、12章の目を覚ましているのを主人に見られる僕の話。主人はいつ何時帰って来るか分かりません。しかし、忠実な門番は、目を覚ましたまま、主人が帰る時を待ちます。そのような僕を見る事ができる主人の喜びは大きいのです。だから、主イエスはこう言われます。「**はっきり言うておが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。**」これは尋常な事ではありません。主人が僕に給仕するなんて事は、人間の世界ではあり得ないこと。しかし、神の国では、主人が僕を食事の席に着かせる、僕の側から言えば、席に着かされるのです。自分が主イエスの給仕をしようと立っていると、主イエスがそばにやって来られ、私たちに席まで案内し、「座りなさい」と言ったださる、そして傍らに立って自ら私たちに給仕をしてくださるのです。それが神の国の宴会の席。

終わりの時の神の国の宴会の席の様子は私たちの礼拝にもしっかりと映し出されています。新型コロナウイルス禍でいつ聖餐式ができるかわかりませんが、私たちは年6回の聖餐式の度ごとに、主イエスご自身に給仕して頂いています。パンとぶどう酒に象徴されるものは、主イエスが備えてくださったもの。そしてそれらを奉仕者の手を通して、主イエスご自身が手渡ししてくださるのです。主イエスの命をかけた愛を手渡ししてくださる。私たちはただ、席に着かされ悔い改めと信仰と賛美をもって頂くだけ。いえ、聖餐がない毎週の礼拝でもそうです。命の糧である御言葉を与えてくださるのは、神ご自身だからです。神ご自身が私たちの霊に、神の御子の霊を蒔いて下さいます。そうして、生きるのに必要なもの全てを神が与えてくださっています。

主イエスは、私たちがこの神の国の宴会の喜びに与るために、エルサレムの十字架の上で、罪の赦しを祈り求めてくださり、死にて葬られ、陰府に降り、三日目に甦り、天に昇り、聖霊を降し、教会を立て、今も東西南北すべての人を共に食事の席に着く「**神の国の宴会の席**」に、招いてくださっています。今は、その招きに応えるべき時です。そのために私たちは生きています。不義にまみれた自分を丸ごと、主イエスに委ね、明け渡し、狭き門をくぐり、造られた本来の喜びに生きるために。そのような私たちを、主イエスは喜んで受け入れてくださいます。主の喜びが私たちを満たし、一つにします。私たち一人一人が、そして一人でも多くの方々が、狭い戸口から入り神の国の宴会の喜びに連なることができますよう、祈りやみません。